

2021年  
12月23日  
木曜日

松枝 法道 教授（環境経済学）

# 「あたりまえ」の影響

非常に当たり前と思われるだろうが、われわれの社会生活は「あたりまえ」から大きな影響を受けている。社会科学を研究分野とする者として、「あたりまえ」の中でも私が特に関心を持っているのは「社会規範」と言われるものである。

社会規範としての「あたりまえ」が大きな役目を果たす場面の一つとして、可能性としては複数の状態が現実になり得る際に、実際にどれが実現するかを決定づけるという状況がある。私が長年文句を言い続けている「恐怖の横断歩道（以前のチャペル講話の話が関学レポジトリにあるのでぜひ読んでみてほしい）」では、同じような経済的境遇の同じような法制度を持つ人々の間でも、信号機のない横断歩道で車が必ず歩行者を優先させるような場所もあれば、ほぼすべての車が歩行者を無視してスピードを上げるような場所もある。そんな二つの対照的な慣習がそれぞれ定着する理由の一つは、

人々の頭の中にある「あたりまえ」が異なるからである。それでも常に同じ人々だけで付き合うのなら人身事故は起こらないだろう。問題は異なる「あたりまえ」を持った人々が交流する時である。車と歩行者との力関係を考えると法律に書かれている歩行者優先の「あたりまえ」の方が望ましいと思うのだが、残念ながら日本の「あたりまえ」を変えるのは自動運転車の到来を待つよりほかはなさそうだ。

別の社会規範の影響として、それがわれわれの好みに影響を及ぼすことがあげられる。特に経済学では人々が意思決定をする上で、それぞれが持つ好みの役割を重要視するが、何をどの程度好ましいと思うかにおいて「あたりまえ」という「基準」が顔を出す。同じ行為の結果であったとしても、ある基準を境にその評価の仕方が全く異なることもあるし、人は自分に直接利害関係のない第三者の境遇にまで自分の「あたりま

え」を持ち込んで怒ったり、悲しんだり、喜んだりする。しつこくて恐縮だが、数か月前、あるバイクが信号機のない横断歩道を渡っていた小

学生を無視してスピードを落とさずに走行したことを目撃した私は、自分でも振り返ると異常に思えるほど腹を立てて、バイクが信号で止まったところに行って注意をした。ケンカになって殴り返されるかもしれないのに、自分を見失うほど怒っていたというわけだ。自分には直接的な影響がない他人の行為に怒りがこみ上げる一つの理由は、私の世の中はこうあるべきだとする「あたりまえ」の像が私の好みに影響を与えていると言えるのではないか。ちなみに、そのバイクの運転手はおとなしい人で私の振る舞いにとっても驚いている様子だった。実は、私もその人がヘルメットを取った時心の中で驚いた。その人は同じ集合住宅に住む30代前半と見える男性で、それまで普通に挨拶を交わす程度

ことはしていたのだが、それ以降彼は私と目を合わそうとはしなくなってしまった。

この私の「あたりまえ」は自分自身の一生の中で比較的短期間のうちに身に付いたものだろう。他にも人間社会には遺伝的に組み込まれるほど長い時間をかけて形成された「あたりまえ」、数世代にわたる居住集団の中で培われてきた「あたりまえ」といろいろな時間空間スケールでの「あたりまえ」があつて、われわれの普段の生活に影響を与えている。どんな「あたりまえ」がどうやって形成されるのかは興味深いし、できることなら人々の暮らしを豊かにする「あたりまえ」は奨励して、弱者を困らせる「あたりまえ」は減らしたいものだ。おっと、その「豊か」「困らす」という価値判断にも「あたりまえ」は忍び込んでいるはずだから、本当にやっかいなのだ。